フットサルをやろう！

御坂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

フットサルをやろう！

【Ｎコード】

Ｎ３３８８Ｌ

【作者名】

御坂

【あらすじ】

自称平凡な男子高校生の僕と存在そのものがエロの悪友、浅岡学、人気者でサッカー（フットサル）に憧れ続けていた美少女、小早川由紀奈の三人が東北の田舎町を舞台に描くドタバタ青春ストーリー。

プロローグ「ホイッスルは突然に」

首都圏から遠く離れた東北の田舎町の県立高校に通っている僕はごくごく平凡な高校生活を送っていた。

何を持って平凡とするのは定義は難しいが仲の良い友達、普通の成績、帰宅部、そして彼女はおろか女友達すらいない。

僕のような高校生は結構多いと思う。つまり普通と言うことだ。

別段、特筆するような奇想天外な事など起きる由もなく毎日が同じ事の繰り返しの日々をただただ消化するだけ。だが、僕はそんな毎日が嫌では無かった。

しかしながら、そんな平穏無事な毎日に異議を申し立てる奴が存在した。

そいつ――――受験の時からの付き合いで特徴といえばエロ。存在そのものがエロとしか言いようのない浅岡学（あさおかまなぶ）は古臭いサッカー雑誌とパソコンでプリントアウトした何かの用紙を僕の机に叩き付け言った。

「フットサルやろうぜ！」

僕は雑誌と用紙と浅岡の顔を順番に見て、一言、言う。

「いきなりどうした？　エロを考えすぎてついに頭でもおかしくなったか」

「っふ。俺は気付いっちまったのさ、彼女もいなければ部活に汗を流す訳でもない青春の愚かさに。そしてお前の正体に！」

浅岡は雑誌のとあるページを開くと僕に見せ付けてきた。

それは将来を有望された一人の男子中学生が率いる中学校が全国大会で優勝した時の記事だった。

一人、インタビューを受ける中学生の僕が写真に映っている。

「水くさいぞ松村、お前がこんな凄い奴だったなんてもっと早くに教えろよ」

昨日、サクセスストーリーのドラマか映画でもテレビでやってい

たかな？
　こいつがこういう事を言い出すのは決まって外部（テレビ）から影響を受けた時だけだ。
　テレビでマジックをやれば一心不乱に手品を勉強し、学園恋愛物をやれば片っ端から女子に告白して前人未到の三十人に連続で振られると言う（一日で）偉業を成し遂げ、男がシンクロナイズドスイミングをやる青春ストーリーの映画が公開された去年の学園祭では競泳用水着一丁で校舎内を走り倒した挙句、二階からプールに飛び込むと言う訳の分からない行動で校長室にまで連行されたある意味で有名人。それが浅岡学と言うアホだ。
「さぁ！　俺と一緒にフットサル大会で栄冠を掴もう。そして一生輝く高校生活の思い出にするんだ！」
　アホくさい、やってられない。めんどうでだるくてやる意味がない。きっぱり断ってやるのが友情だ。
「浅岡、悪いことは言わないが――――」
「フットサル大会？　アンタ達が出るの？」
　近くの席で小説を呼んでいたクラスメイトの女子にして端正な容姿もさることながらクールなことでも知られている為、学年でも中々の人気を誇る小早川由紀奈が関心したように尋ねてきた。
　女子と会話したのが数ヶ月前の「進路のプリント出して」が最後の僕からすれば高嶺の花過ぎて在学中は話す事なんかないだろうとタカを括っていた女子でもある。
「思い出の一ページはここから始まる！」
「おまえ、人の話聞いてねぇだろ。それに、俺はやるなんて一言も……」
　由紀奈は僕の机に乗っている用紙をひょいっと取り上げてじっくりとそれを読んでいたが、突然、僕の机に用紙を叩き付けて嬉々とした声を上げる。
「あたしもやるわっ！」
　用紙が可哀相だな等と考えていた僕は驚き顔を上げ由紀奈を見た。

その時の由紀奈の顔は滅多に見られないほどの眩しい笑顔だった。
「中学でも高校でも女子サッカー部がなくて諦めかけてたけど、チャンスってどこに転がっているのか分からないものね！」
快く迎える浅岡を見ながら僕は雑誌の僕を見下ろす。
将来の夢はサッカー選手と得意げに語ってる僕がいた。
現金なものだけど、可愛い女の子が一緒にやるってだけでもう一度サッカーをやってもいいかな何て思っている自分が居た。
だけどしょうがないだろ？　小早川由紀奈は本当に可愛らしい女の子だったのだから。そんな子と青春の思い出を築けると血迷った僕を責められる人間なんかいないはずだ。
そんなこんなで僕と浅岡と由紀奈の奇妙な友情（？）のサッカー生活は始まりを告げた。

第1話「生きるって難しいよね、子供も大人も」（前書き）

この物語を読む時は部屋を真っ暗にして携帯、又はパソコンのディスプレイに可能な限り顔を近付けて読んで下さい（嘘）

※この物語はエロ要素が一切ない至って健全な学園青春スポーツ物です（多分）

第1話「生きるって難しいよね、子供も大人も」

ミッション01。正規のサッカー部からのボールを数個、強奪。それが僕に課せられた使命だった。

フットサルやろうぜと浅岡が言い出したのは昼休み。それから放課後までの時間で他の仲間達を集めるのは不可能だった。その為、三人でこれからの計画を協議した結果のミッションだ。

とりあえず、すぐに使える空気の入っていてそれなりのサッカーボールを手に入れて集まるかどうかも分からない後の仲間達の中心、主力になる為に早速練習しておこう。それが小早川さんの出した結論だ。流石、成績優秀者、頭の造りも優等生だ。

まぁ、僕の通っている県立高校サッカー部は部員が十一人ギリギリでしかもまるでやる気の感じられないチャラチャラした集団だ。きっと『サッカーやってりゃ可愛いマネージャーとか来てモテんだろ』的なノリで集まったとしか思えない。そんな奴等からサッカーボールを強奪するのは容易い。はずだ。多分、かもしれない。

ちなみに浅岡と小早川さんは学校近くの体育館を借りに行っている。

僕はノリノリな足取りで部室長屋に続く渡り廊下を駆け抜ける。

途中、渡り廊下を根城にしているウェイトリフティング部のダンベルに躓いて派手に転んだのは内緒だ。

「お、松村じゃん。いつも一緒のアホ岡はいないのか？」

サッカー部の部室のドアを開けると、同じクラスの坊主頭（恐らくサッカー部で唯一の真面目君）がパンツ一丁の姿でパイプ椅子に座っていた。

しかしながらこんな所でまでネタにされて不憫な奴だ、浅岡は。

「あのバカはちょっとね。所でさ吾妻（あずま）、室内用のサッカーボール2、3個、都合してくれない？　フットサル用のあるだろ？」

「はぁ？　いや、何に使うのかは知らないけど別にいいけどよ。バ

レやしないだろうしな」
持ち運びにも気を使ってくれたのかケースに入っていたフットサル用のサッカーボールを適当なサイズの袋に入れてくれた。
「サンキュ、これがないと始まらなくてさ。まさか室内で外のボール使うわけにもいかないしな」
「……なぁ松村。お前、またサッカー始める気になったのか？」
また。と言った吾妻は当然、僕が昔サッカー少年だったことを知っているのだ。県のトレセン（トレーニングセンター制度の略称）でも何度か吾妻とは顔を突き合わせている。
吾妻は地区トレセンどまりでナショナルトレセンまで行った僕と高校で再会して以来、熱心にサッカー部への入部を促していた。あまり過去の思い出を話すのは好きじゃないが、そうでもしないと吾妻は納得したかった。だから、僕は吾妻にだけサッカーを辞めた理由を説明したのだ。
「成り行き上な、まぁやるって言ってもお遊び程度だろうから問題ないさ」
「そうか。形はどうあれお前がまたサッカーをやる事を選んで俺は嬉しいよ、松村の才能が埋もれるのは勿体無いって」
才能、か。僕の場合はそんなモノじゃない。
僕は幼稚園の頃からサッカーが大好きだった。
一生懸命練習した。
小学校の頃のコーチはヘタクソでも努力すれば上手になれるが口癖だった。
最初の頃はヘタで周りからよくヤジられていたけど、陰の努力を惜しまず、小学校五年生の時に初めてレギュラー入りをした。
思えばその頃から周囲にも認められるようになり、中学校でも一年生でレギュラーだってもてはやされた。
あの頃は本当にサッカーが面白くて仕方が無かった。ただ、サッカーが出来るそれだけで僕は良かった。
けど、積み木を積み上げるのにどれだけ苦労しても崩すときは一

瞬だ。何週間も掛けて並べたドミノが倒れるのはほんの数分と同じように。
僕が積み上げてきた努力も一瞬で崩され、そして僕はサッカーを辞めた。
「なぁ、吾妻。サッカー好きか？」
「っ？　当たり前だろ」
「そうか。俺も好き『だった』よ。だけど、どれだけ熱を上げても冷める時は来る、人は変わってしまうんだ。生きるって難しいよな」
怪訝な表情を浮かべる吾妻を尻目に僕はサッカーボールの入ったビニール袋を揺らし、わざと陽気な声を出して言う。
「じゃあ、サッカーボールは頂いた、また会おう明智君。フハハハハハハ」
帰りの渡り廊下で今度はシャフトに躓いて顔面から転んだのは、本当に内緒だ。

第2話「現実」

高校近くに古びた町民体育館がある。
その体育館は利用者が皆無な上に申請すれば町民なら誰でも利用できると言うまさに拠点とするには持って来いの場所だ。朝の八時に開き夜も九時まで開いていてくれるので練習時間も取りやすい。
やたら重たいドアを押し開けて受付のおじさんに用件を伝えると、おじさんは体育館に続くドアに視線をやる。
「中の物は壊さないでくれよ」
今時の若い者は粗暴だと言う固定概念にでも囚われているのか、おじさんは弱々しい声でそう呟いた。僕は苦笑いをして外履きを指定の場所に放り込むと学校から持ってきた体育館シューズに履き替える。
家に帰ればフットサルシューズもあるが足のサイズが合わないだろうし、何より『お遊び』でしかないのに専用の用具はいらないだろう。
「おっ、ようやく来た。おっせーぞ、松村」
黙れ浅岡。
それにしても長い髪をポニーテールにした小早川さんもクラスで見るのとは違った感じでいいな等と内心でにやけている場合ではない。
「おまえはボール使うの禁止な、走っとれ。てかちゃんとランニングはしたか？」
ほとんどの団体球技で行われる行為は『走る』と言うことだ。例外的にゴルフ等も存在するが、サッカー、バスケット、アメリカンフットボール、ラグビー。
従って長い時間、走れない者がいればそれだけ足手まといになってしまう。
僕が中学校の頃は練習前には十キロも走らされたものだ。今回は

初めての練習かつお遊び、更に女子である小早川さんの存在を考慮して一キロに設定しておいた。
「途中で浅岡がサボろうとしたがそこはキッチリやらせといた」
ありがとうございます、小早川さん。
「ったく、言い出しっぺの癖にサボんなよ……まぁいいや」
メンバーは三人。基礎トレをするにしても一人欠けてしまうが、仕方ないだろう。それにどうせ今日は基礎練だけで日が落ちるだろうし。
「じゃあ、まずは基礎練習から始めようか」
「あの二人一組でやるやつか？」
小早川さんはやはりサッカーの事は詳しいらしく基礎練習と言っただけで想像はついたようだ。
「うん。浅岡のバカが本当に素人だから、一応説明させて。基礎トレは二人一組でやるもので一人がボールを投げる係、もう一人が投げられたボールを蹴り返す係。浅岡、俺に向かってボールを投げてみてくれ」
サッカー部から持ってきたボールを出すと、それを浅岡に向かって軽く蹴る。
「うぉっしゃあ！　任せとけ！」
「全力じゃなくて軽くな、軽く」
一応、念のために釘をさしておく。そうしないとこのアホの場合は安心できない。
「なんだよ。軽くかよ」
明らかに不平を漏らしぶつぶつと何かを言う所を見ると本当に全力で投げ付けるつもりだったな。
その時はその時で全力で蹴り返すつもりだったので浅岡は痛い教訓を学ぶことになっただろう。
投げられたボールをインサイドで蹴り返す、次にインステップ。そして太ももを使ってトラップした後にインサイドかインステップで蹴り返す動作を右足と左足とで行う。

後は胸トラップとヘディングの動作を加えれば基礎練習は一通り終わる。後はアウトサイドもあるのだが、今はスルーしておこう。
突き詰めればもっとあるのかも知れないが僕はこれくらいしか知らない。
「本当は立ち止まってじゃなく左右に動きながらやるんだけど、まぁ最初だから立ち止まってから始めよう。この一連の動作を……そうだな、五十回ずつ」
「五十回もやるのかよ！？」
「何事も基礎が大事だ。俺が小学校の時は百回だったぞ、これでも少ない方だ」
不平不満を漏らす扱いにくい浅岡と文句ひとつ言わない小早川さん。何となく指導する側の気持ちが分かったような気がする。
「……インサイド、アウトサイド、もも、ヘディングのリフティングを連続百回地獄の刑に処するぞ？」
途中で一回でも落としたら最初からやり直しだ。つまりヘディングの九十九回目で落としたらインサイドの一回目からとなる。
その地獄を懇切丁寧に説明した結果、一人よりは二人でやる練習のほうがいいと思ったのか浅岡は基礎トレを飲んだ。
僕はもう出来るからと驕りのつもりはない。が、この二人がどこまでやれるのかを見る必要もあるので黙々と基礎トレに励む二人の傍で僕は傍観していた。
小早川さんはこの練習をやった事があるのか、インサイドもインステップもトラッピングも綺麗で見ていて惚れ惚れするくらいだった。
その反面、浅岡は酷い、酷過ぎる。いや、最初はこんなものかも知れないが、それにしても酷い。
インサイド、インステップ共にまともに蹴り返すことは叶わず、時にはホームランのせいで僕が何度も玉拾いに行った。トラッピング技術に関しては流石は素人としか言いようがない。てか素人でももっとマシな人は多いと思う。

明らかに浅岡のせいで無駄な時間を要している。このままだと基礎トレで四時間くらいかかるんじゃないだろうか。
実際には基礎トレを始めてから一時間と二十八分三十四秒で終わった。ちなみに所要時間の九割が浅岡のせいだ。
最初はこんなものだろうか。
最後の練習を終えると日頃から運動不足な浅岡は大の字で体育館の床に大の字で寝っ転がる。
「だらしない……」
ごもっとも。
「つ～かさ。松村が居ればどんな相手だって楽勝だろ……？」
「残念でした。サッカーってのは一人じゃ勝てないスポーツなんだ」
「いや、でもさマンガみたいに……」
「オーバーヘッドキックはおろかドライブシュートもゴールネットを突き破る虎のようなシュートも地面を這うような超低空シュートもボールが分裂するシュートも相手選手を殺す勢いのチャージもユニフォームが裂ける程の破壊力を秘めたシュートも俺はできません。てかそんな人間はいません。今は二次でなく三次元を見ろ」
今、名言いったみたいな自己満足に浸っていると小早川さんが転がっていたボールを拾い上げる。
「松村君」
「はい？」
「リフティングで勝負しないか？」
同時に始めて先に落とした方が負けのシンプルなルールだ。
僕としてもブランクでどのくらい衰えたのか知る必要もあるし、何よりまだ身体を動かしていない。
快くその勝負を受けた僕は浅岡に審判の役を負わせた。
まぁ結局は勝ち負けは決まらなかった。
何故かって？　僕も小早川さんも百回以上、落とさなかったから。
タイムアップ。引き分けだ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3388l/

フットサルをやろう！

2010年10月11日06時52分発行